

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：42729

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K17509

研究課題名（和文）要介護高齢者の自然排泄移行を支援する訪問看護実践モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a Home Nursing Practice Model to Support Transitioning to Spontaneous Elimination for Elderly People in Need of Long-Term Care

研究代表者

田中 悠美 (Tanaka, Yumi)

川崎市立看護短期大学・その他部局等・講師

研究者番号：00737819

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：要介護高齢者の自然排泄移行への支援における訪問看護師の具体的な行動を項目化した「要介護高齢者の自然排泄移行訪問を支援する訪問看護実践モデル」（以下、モデル）の作成を目的とした。国内学会誌において2009年～2019年に発表され、在宅または病院、高齢者施設にて看護師および多職種が高齢者の排泄へ介した成果が報告されている15文献をレビューした。次に、米国アイオワ大学で開発され国際的に認知される看護介入分類（NIC）から、計15の看護介入のラベルを参照し、151項目の看護師の行動を抽出した。これらの結果を受け、モデルに含む要介護高齢者の自然排泄移行への支援における訪問看護師の行動77項目を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、自然排泄とは、要介護高齢者がトイレ、ポータブルトイレ、尿便器といった排泄に使用する用具を用いて排尿、排便ができることと定義している。尿失禁や便秘などの排泄障害は加齢やADL低下により増加し、家族介護者の負担感を高める。要介護高齢者の排泄の問題は、要介護高齢者自身の機能的、器質的問題のみならず介護的要因も影響し、適切な排泄ケアにより自然排泄に移行できる可能性が示唆されているが、要介護高齢者の自然排泄移行を目的とした訪問看護実践に関する報告は見当たらない。在宅の現状に即した看護実践モデルの開発により、排泄障害をもつ要介護高齢者および家族のQOLの向上、介護負担の軽減に貢献できる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to create a "Home Nursing Practice Model to Support Home Visits to Transition to Spontaneous Defecation for the Elderly in Need of Care" (hereinafter referred to as the Model), which itemizes specific actions for home nurses in supporting the transition to spontaneous defecation for the elderly in need of care.

We reviewed 15 references published in national journals from 2009 to 2019 that reported outcomes of nurses and other professionals intervening in the elimination of the elderly at home, in hospitals, and in elderly care facilities. Next, a total of 15 nursing intervention labels from the Nursing Intervention Classification (NIC), developed at the University of Iowa in the United States and recognized internationally, were consulted to extract 151 nurse behaviors. Based on these results, 77 home care nurse behaviors in supporting the transition to spontaneous elimination for elderly persons requiring care were developed for inclusion in the model.

研究分野：在宅看護学

キーワード：訪問看護 在宅高齢者 自然排泄移行 自立排泄 看護実践モデル セルフケア支援

1. 研究開始当初の背景

我が国では国民の4人に1人が高齢者という時代を迎え、要介護高齢者は560万人を超えた。2013年国民生活基礎調査における要介護者のいる世帯の構成割合の推移をみると、単独世帯、核家族世帯が6割以上を占め、家族介護をめぐる状況は厳しさを増している。

尿失禁や便秘などの排泄障害は加齢やADLの低下により増加する問題であり、排泄の介護は家族介護者の負担感を高める重要な要因である(伴, 2004; 菊池ら, 2010)。排泄援助は日常的で頻度が多く、この援助の毎回をサービス提供者が担うことは、利用者や家族の経済的負担が多くなる。したがって、訪問看護や訪問介護を利用している状況においても、サービス提供者と家族介護者が分担しながら排泄援助を行っているケースは多い。嘉手苅ら(2007)は、訪問看護の排泄援助の特徴として、家族の介護負担が増加しないように排泄援助方法を選択していることをあげ、岡本ら(2006)は、家族介護者が排便援助を行うことが困難である場合、訪問看護師は要介護者のセルフケアの可能性の有無に関わらず、習慣的に摘便、洗腸を行うと報告している。その一方で、後藤ら(2002)は、訪問看護利用の在宅高齢者において、安易におむつを使用しているものがあり、23.9%におむつはずしの可能性がある」と指摘している。研究者が行った先行研究(田中ら, 2014)では、排泄障害のある在宅要介護高齢者191人において、尿意なし70.7%、便意なし59.7%、尿失禁73.3%、機能性尿失禁54.5%、便秘73.3%、便失禁34.6%であり、おむつは86.4%が使用し、摘便は71.2%に適用されていた。さらに、この要介護高齢者の自然排尿および自然排便移行の可能性について訪問看護師に判断を求めたところ、排尿は29.3%、排便は59.7%に移行の可能性があり、このうち、排尿、排便ともに移行可能とされたのは26.7%であった。

これらのことから、在宅において要介護高齢者の排泄の問題は、要介護高齢者自身の機能的、器質的要因のみでなく介護的要因も影響しているが、先行研究(後藤ら, 2002; 田中ら, 2014)では、適切な排泄ケアにより自然排泄に移行できる可能性がある」と示唆されている。これまでに、要介護高齢者の自然排泄移行を目的とした訪問看護実践に関する報告は見あたらず、研究者は2015年度科学研究費助成事業(若手研究B)の採択を受け、訪問看護援助により、自然排泄移行が可能となった要介護高齢者の事例について、訪問看護師が実施した看護援助内容を調査した。結果、訪問看護師が要介護高齢者の自然排泄移行に向けて実施した看護援助内容として、要介護高齢者の身体状況のアセスメント、動作拡大のためのリハビリテーション、便性のコントロールといった個人的因子へのアプローチと、家族介護力のアセスメント、療養環境調整、家族への指導、他職種との連携といった環境因子へのアプローチがあげられ、本研究への重要な示唆を得た。

このように、在宅での個人的因子、環境的因子へのアプローチにより、要介護高齢者が自然排泄に移行できることは、要介護高齢者および家族のQOLの向上、介護負担の軽減につながる。そのため、現場の実践を基に開発され、信頼性と妥当性が検討された要介護高齢者の自然排泄移行を支援する訪問看護実践モデルが必要である。

2. 研究の目的

要介護高齢者の自然排泄移行への支援における訪問看護師の具体的行動を項目化した、「要介護高齢者の自然排泄移行を支援する訪問看護実践モデル」(以下、モデル)の作成を目的とした。

3. 用語の定義

1) 自然排泄

トイレ、ポータブルトイレ、尿便器といった排泄に使用する用具を用いて、排尿、排便ができることとした。

4. 研究の方法

1) 高齢者の自然排泄移行への介入に関する国内文献レビュー

モデルに含む、訪問看護師の具体的行動の項目を検討するため、国内学会誌で発表され、高齢者が自然排泄へ移行するための介入の実施内容やその成果が報告されている文献のレビューを行った。

医学中央雑誌Web版を用い、2009年~2019年までの過去10年間に発表された原著論文で文献の検索を行った。検索キーワードは「高齢者」「在宅」「排泄」「支援」とした。該当した文献の抄録を読み、15件を抽出し、文献の発表年、研究フィールド、支援の内容の記述に着目し、分析を行った。

2) 「看護介入分類(NIC)原書第6版」からの項目の抽出

「看護介入分類(NIC)」は看護師が実施する治療を記述し、介入を示す各ラベルに定義と看護師がその介入を理論的に実行に移す際の行動のリストを示す(Bulechek et al., 2015)。「看護介入分類(NIC)原書第6版」に掲載される、排泄に関する6つの看護介入(尿失禁ケア、排尿管理、排尿習慣訓練、排便管理、排便訓練、便秘管理/糞便埋伏管理)のラベルから、要介護高齢

者の自然排泄移行への支援における訪問看護師の行動として適切と考えられる項目を抽出した。

項目の抽出にあたっては、研究代表者が2015年～2016年に実施した、自然排泄移行が可能となった要介護高齢者の事例に対し訪問看護師が実施した看護援助内容に関する質的研究の結果を参考にし、研究協力者である在宅看護研究者の協力を得て行った。

3) 「要介護高齢者の自然排泄移行を支援する訪問看護実践モデル」の作成

1)、2)を統合し、「要介護高齢者の自然排泄移行を支援する訪問看護実践モデル」を作成した。

5. 研究成果

1) 高齢者の自然排泄移行への介入に関する国内文献レビュー

対象論文15件の発表年は、2010年(1件)、2011年(1件)、2012年(1件)、2015年(1件)、2017年(3件)、2018年(5件)、2019年(3件)であり、近年増加傾向にあることがわかった。研究フィールドは、在宅が3件、病院が10件、特別養護老人ホームや介護老人保健施設の施設2件であった。

分析した論文の多くは病院を研究場所としており、高齢者は移動動作に支障のあるものが多く、排泄に伴う移動能力を改善するためのリハビリテーションを行ったと報告しているものが多かった。また、運動器の訓練だけでなく、環境調整、栄養不良の改善、家族への支援も効果的であった。さらに、排泄フローシートやカンファレンスなど、高齢者の状態や課題を多職種間で可視化し、共有・連携することが証明された。看護師による報告では、自然排泄移行のためのケアを行うには身体症状が安定していることが重要であり、高齢者の健康状態の変化は排泄への介入を中断させることが示唆された。

本研究は、The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (2020年2月28日～29日 大阪府開催、新型コロナウイルス感染症拡大のため紙上発表)にて、発表した。

2) 「看護介入分類(NIC)原書第6版」からの項目の抽出

「看護介入分類(NIC)原書第6版」に掲載される、排泄に関する6つの看護介入(尿失禁ケア、排尿管理、排尿習慣訓練、排便管理、排便訓練、便秘管理/糞便埋伏管理)のラベルに加え、セルフケア援助:排泄、運動療法:関節可動性、運動療法:歩行、セルフケア援助:摂食、栄養モニタリング、栄養管理、家族支援、家族関与促進、服薬管理のラベルからも追加項目を検討した。計15ラベルから151の行動を抽出した。

3) 「要介護高齢者の自然排泄移行を支援する訪問看護実践モデル」の作成

1)、2)の研究成果を統合し、要介護高齢者の自然排泄移行への支援における訪問看護師の具体的行動77項目(表1)を精選し、モデルを作成した。

なお、本モデルの作成過程について、第37回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会総会(2020年2月7日～8日 静岡県開催)にて発表した。

表1: 要介護高齢者の自然排泄移行への支援における訪問看護師の具体的行動

1	排泄の一連の行為(尿・便意を感じる、トイレを認知する、トイレに移動する、衣類の着脱、便座に座る、尿・便を排出する、後始末をする)の自立の程度を明らかにする
2	排尿障害を引き起こした要因を明らかにする
3	排便障害を引き起こした要因を明らかにする
4	排尿状況をアセスメントする(頻度、量、失禁の状況など)
5	排尿の記録をつける
6	排尿の間隔のスケジュールを決める
7	必要に応じて、泌尿器科受診を主治医と相談する
8	残尿測定をする
9	尿路感染の症状と徴候をアセスメントする
10	排便状況をアセスメントする(頻度、性状、形状、量、失禁の状況など)
11	排便の記録をつける
12	下痢・便秘の症状と徴候をアセスメントする
13	必要に応じて下剤を使用する
14	必要に応じて排便をする

15	必要に応じて浣腸をする
16	直腸指診をして便塊の下降を確認する
17	直腸指診は差し控える
18	排泄のためのプライバシーを確保する
19	トイレで排泄できた場合、肯定的なフィードバックをする
20	容易にトイレにへ行けるように環境を調整する
21	容易にトイレにへ行けるように衣服を調整する
22	定期的に体重を測定する
23	体重の変化をアセスメントする
24	水分摂取状況（量・回数・内容など）をアセスメントする
25	水分摂取の記録をつける
26	必要に応じて、水分摂取量を増やす
27	食事摂取状況（回数・量・内容・摂取カロリー・食欲など）をアセスメントする
28	食事摂取の記録をつける
29	必要に応じて、食物の選択肢を提供し、より健康的な選択に向けてアドバイスをする
30	口腔ケアを行う
31	必要に応じて、高齢者がよく合った義歯を使用しているか確認する
32	口腔内に異常がないか確認する
33	嚥下能力をアセスメントする
34	トイレへ誘導する
35	必要に応じておむつを使用する
36	関節可動域の制限とそれが機能に与える影響を明らかにする
37	自分を移動させる現在の高齢者の能力を明らかにする
38	別の場所に移動する技術を指導する（ベッドから車椅子・ポータブルトイレへ、ベッドからトイレへ、など）
39	安全な移動技術と歩行技術について、高齢者/家族を指導する
40	自立して移動できるように、必要に応じて援助用具（杖・歩行器など）を用いる
41	援助用具の入手方法を説明する
42	身体の動きを制限しない緩やかな衣服を着せる
43	転倒の有無と状況を確認する
44	運動・活動の際の不快感や疼痛の部位と性状をアセスメントする
45	運動・活動を開始する前に、疼痛をコントロールする
46	四肢や体幹のストレッチをする
47	マッサージをする
48	運動プログラムの作成と実行にあたって、リハビリ専門職と協働する
49	薬の服薬や管理状況をアセスメントする
50	必要に応じて、正しい服薬のための方法を検討する
51	健康状態の変化と生活への影響をアセスメントする
52	健康状態の変化の要因を明らかにする
53	健康状態の変化を医師に相談する

54	高齢者の生活歴を明らかにする
55	高齢者の長所を明らかにして、それらを強化できるように援助する
56	ほんの小さな成功でも明らかにできるように高齢者を援助する
57	援助による変化をアセスメントする
58	援助による変化を、高齢者に関わるすべてのサービス提供者で共有する
59	サービス利用に対する高齢者・家族の考え方を明らかにする
60	家族に対する高齢者の気持ちを明らかにする
61	健康状態や生活機能の回復に対する高齢者の考えを明らかにする
62	高齢者との信頼関係を促進する
63	家族との信頼関係を促進する
64	高齢者のケアに関与する家族メンバーの能力を明らかにする
65	家族の健康状態や生活状況を把握する
66	家族の介護に対する負担を把握する
67	主要な家族介護者の身体的・情動的、教育的な資源（リソース）となるものを明らかにする
68	家族構造と役割をアセスメントする
69	家族の関心、感情、疑問に耳を傾ける
70	家族の価値観を批判的でない態度で受け入れる
71	家族メンバーによる高齢者のケアへの関与をアセスメントする
72	家族の負担を軽減するために、そして/または家族がケアを提供できない場合に、家族に代わって高齢者をケアする
73	高齢者の健康状態や生活機能の回復に対する家族の考えを明らかにする
74	必要な場合、レスパイトケアなど、在宅ケアの様々な選択肢を提供する
75	訪問看護以外のサービス提供者に運動プログラムの実施を依頼する
76	訪問看護以外のサービス提供者にトイレ誘導を依頼する
77	高齢者、家族、サービス提供を行う専門職それぞれの期待が一致しているかどうか明らかにする

6. 今後の課題

本研究で作成を行った、「要介護高齢者の自然排泄移行を支援する訪問看護実践モデル」に含む 77 項目の妥当性について、訪問看護実践者を対象とした調査を実施し、検討していくことが必要である。

文献

- 伴真由美(2004). 排便に援助を必要とする在宅要介護者とその家族の状況, 千葉看護学会誌, 10(2), 49-55.
- 後藤百万, 吉川羊子, 服部良平, 他(2002). 被在宅看護高齢者における排尿管理の実態調査, 泌尿器科紀要, 48(11), 653-658.
- 嘉手苅英子, 金城忍(2007). 在宅要介護者の排泄上の問題に対する訪問看護師の援助の特徴, 千葉看護学会誌, 13(2), 27-35.
- 菊池有紀, 葉袋淳子, 島内節(2010). 在宅重度要介護高齢者の排泄介護における家族介護者の負担に関連する要因, 国際医療福祉大学紀要, 15(2), 13-23.
- 岡本有子, 辻村真由子, 吉永亜子, 他(2006). 訪問看護師の排便援助に関する研究: 排便問題を抱える要介護高齢者と排便介助のできない家族介護者に対して, 千葉看護学会誌, 12(1), 100-107.
- 田中悠美, 渡邊順子, 篠崎恵美子(2014). 排泄障害のある在宅高齢者に対する看護介入行動の実態と自然排泄移行の可能性に関する調査, 日本看護医療学会雑誌, 16(2), 29-39.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yumi Tanaka
2. 発表標題 Review of the literature on support for toileting independence provided to older care recipients
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中悠美
2. 発表標題 在宅高齢者の排泄セルフケア能力を高める訪問看護支援モデル構成項目の検討
3. 学会等名 第37回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yumi Tanaka, Mari Tomiyasu
2. 発表標題 Development of a practice model for visiting nurses to modify excretion behavior among elderly people requiring long-term care
3. 学会等名 International Nursing Research Conference 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中悠美, 富安眞理
2. 発表標題 要介護高齢者の自然排泄移行に向けた訪問看護実践モデルの開発
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------